

# スポーツ集団におけるチームワーク形成に関する研究

木村 勇  
(保健体育専修)

## I 研究目的

スポーツ場面では、「チームワークの勝利」「チームワークが優勝のカギ」など、チームワークという言葉を耳にする。チームワークという概念は、スポーツ場面だけでなく、医療、学校、ビジネス場面でも用いられている。その概念は多義にわたり、包括的な捉え方がなされている。チームワークについては、これまで「集団目標達成のために各自が黙々と自分の任務を遂行すること<sup>1)</sup>」「集団状況において何らかの目標や関心対象を共有して行う集団成員間の関係活動<sup>2)</sup>」「集団の目標に向かって各自の仕事がスムーズに機能していること<sup>3)</sup>」といった定義がなされている。さらに、「集団運営を共通の関心・目標としての、対人関係を中心とした技法<sup>4)</sup>」と述べられているように、チームワークは、人間関係の形成なしでは成立し得ない。

また、これまでスポーツ集団においては、チームワークは集合効力感や集団凝集性と、競技成績との関連からの方法などで測定されてきた<sup>5)</sup>。チームが目標達成のための集団であるならば、成績はチームワークを評価するうえでの観点となり得る。しかし実際、成績に結びつく要素は構成員個人の能力(スポーツでは競技力)が大きく関わり、影響を受ける。永田ら<sup>6)</sup>は、スポーツ集団の組織としての成果を組織成果とし、さらに、「競技スポーツ集団の客観的な競技成績や満足度という今までの研究の成果から一般化されている捉え方を、検討し直すという視点」から、組織成果を競技成績と構成員の満足度で捉える「内容型組織成果」と、期待理論を援用し満足を獲得するプロセスで捉える「プロセス型組織成果」の2つの概念で捉えている。

ここでは、スポーツ集団のチームワークを目標に対する競技成績から捉えるよりも、目標の達成に向けての過程の評価という視点から捉えることにしたい。

バスケットボールやバレーボールなどのチームスポーツでは、指導者ではなく、選手同士が協力して危機に立ち向かう場面が存在する。さらに、大学の運動部の中では、現場での指導者が存在しない環境にあるチームがある。そのようなチームにあっては、チーム構成員が目標を認識し、役割を分担したり、自分ができることを把握したりすることが重要になる。また、永田らは「目標による管理過程の優れた集団は指導者のリーダーシップを代替する傾向がある<sup>7)</sup>」と述べており、スポーツ集団そのものが目標管理能力を高めることによって主体的な運営を可能にすることを示唆している。

そこで本研究では、スポーツ集団のチームワークを、指導者ではなく、構成員が主体となつてなされるものと捉える。構成員が主体となり、目標を管理していくためには、どのような要素が関わってくるのかを明らかにする。また、それらに影響する要素を高めるた

めの具体的方策を導くこと、そして、最終的には目標管理について構成員一人一人が主体となるチームワーク形成の指針を示すことを目的とした。

## II 研究の意義

スポーツ集団に所属する人々は、自ら選択した運動の集団に主体的に関わることにより、より深く運動を追求することができる。目標設定や管理についても自ら活動の主体として取り組むことは、活動をより豊かにしていくものであると考える。しかし実際は、目標設定・管理の主体が構成員ではなく、指導者であるスポーツ集団が存在する。学校運動部は、「スポーツ集団の自主的管理・運営の能力を鍛え、連帯や協同を体験する<sup>8)</sup>」という意義を持っており、生涯にわたるスポーツ活動の基礎となるものである。それにも関わらず、活動の大部分が指導者に依存してしまい、部員の「自主的管理・運営」が促進されない運動部が存在する。また、学校体育の場面にあっても、チーム分けなどによる即席チームでの活動は多く行われている。そこでは、「チームで協力しよう」「チームワークよく」といった指導者の働きかけがなされているが、実際、具体的な手だてはなされていない。そのような即席チームでの活動にあっても、目標管理の過程は存在し、その能力を高めるチャンスにもなりうると考える。

本研究では、指導者ではなく、選手達自らがチームの目標管理に主体的に関わり、活動するためには、どのような要素が必要なのかを明らかにする。それは、指導者不在の環境にあるスポーツ集団において、資料となり、チームづくりに役立てられると考える。さらに、指導者においても、スポーツ集団について構成員自らの主体的な取り組みが促進されるような指導体制のあり方を再構築する上での一資料として提供することは意義のあることだと考える。

## III 研究方法

### 研究の手続き

本研究では、文献研究、質問用紙調査、実験調査を実施する予定である。

#### 1. 文献研究

チームワークについて、以下の観点により文献研究を行い、目標管理過程を中心にチームワークの構造を捉える。

- ①ビジネスチームとスポーツチームの共通点・相違点
  - ②役割分担とリーダーシップ
  - ③コーチの役割・概念について
  - ④目標管理と意思決定について
  - ⑤目標管理におけるコミュニケーションの重要性
2. 文献研究をもとに影響する要因についての仮説を立て、実証調査を行う
- ・質問用紙によって、仮説で挙げられた要因について実証調査をする。また、それぞ

れの要因の影響関係について調査する。

- ・対象はまだ未定であるが、運動部員(チームスポーツ)を予定している。

### 3. 具体的方策を示す

仮説) スポーツ集団の優れた目標管理は、意思決定の能力が大きく影響する。問題をどれだけ的確に捉え、判断し、行動に移すことができるかが目標管理の上で重要である。そして、意思決定の能力はスポーツ集団自らが高められるスキルである。

→そこで意思決定のスキルを高めるトレーニングを作成する。そこでソーシャル・スキル・トレーニングを参考にする。

#### ※ソーシャル・スキルとは

ソーシャル・スキルとは、「他者との関係や相互作用を巧みに行うために、練習して身についた技能」と定義されているが包括的な概念であるため、研究者間で統一的な定義がないのが現状である。一方、スポーツ心理学の領域では、「心理的スキル」という用語も用いられ、「メンタルトレーニング」は「心理的スキルトレーニング」と呼ばれることも多くなっている。「スキル」という用語が用いられているのは、その言葉に「練習を重ねることで上達することが可能である」という意味を含んでいるからである。

ソーシャル・スキルは、*socialskills* と表記されるように、具体的な多くのスキルで構成されていると考えられている。さらに、ソーシャル・スキルはコミュニケーションスキルそのものとも考えられ、さまざまな考え方で概念化が行われている。そのため、ソーシャル・スキル・トレーニングには、その高めたいスキルに応じて、多様な手法がとられている。杉山によると、「スポーツ場面では、場面特有のソーシャルスキルが存在している可能性があり、体育・スポーツ研究においてソーシャルスキルを扱う際には、社会、文化的要因だけでなく、状況要因をも充分に考慮する必要がある<sup>9)</sup>」と述べている。

## IV 現在の経過と今後の課題

現在は、先行研究を調べている段階であり、知識をより深めた上で研究目的、研究方法についてもう一度検討する必要がある。

## V 文献

### 引用文献

- 1)国分康孝(1996), 「チームワークの心理学」, 講談社現代新書, p11
- 2) 小野眞理子(2004), 『現代のエスプリ「チームワーク形成と養成のトレーニング』, 至文堂, pp99-100
- 3)国分康孝(1996), 同掲書, p13
- 4)小野眞理子(2004), 同掲書, pp99-100

- 5) 阿江美恵子(2005), チームづくりとコミュニケーション, 体育の科学, Vol.55 , No.10, p764
- 6) 永田靖章他(1996) : 競技的スポーツ集団の組織成果に影響を及ぼす組織要因とその過程に関する研究, 愛知教育大学研究報告, pp2-3
- 7) 永田靖章他(1996), 同書, p9
- 8) <http://www.tuins.ac.jp/jm/library/kiyou/2005kokusai-PDF/tsuruyama.pdf>
- 9) 杉山佳生(2005), スポーツによるライフスキルとソーシャルスキル, 体育の科学, Vol.55 , No.2, p764

#### 参考文献

- 1) 竹内靖雄(1999) : 「チームの研究－成功と失敗の人間学－」, 講談社現代新書
- 2) 相川充・津村俊充編(1996) : 「社会的スキルと対人関係」, 誠信書房
- 3) 小林正幸・相川充(2005) : 「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる」, 図書文化
- 4) 浅見俊雄・平野裕一訳(1989) : 「スポーティング・ボディマインドーいかに心を・コントロールするかー」, 紀伊國屋書店
- 5) Harvard Business Review(編集)(2001) : 「意思決定と思考技術」, ダイヤモンド社
- 6) Harvard Business Review(編集)(2001) : 「コミュニケーション戦略スキル」, ダイヤモンド社
- 7) Harvard Business Review(編集)(2001) : 「不確実性の経営戦略」, ダイヤモンド社
- 8) 本間道子他(2004) : 集団成果に影響を及ぼす集合効力感の効果, 日本女子大学紀要人間社会学部, 第15号
- 9) 児玉光雄(2005) : チームワークを育てるリーダーと選手の理想像, コーチングクリニック, ベースボールマガジン社
- 10) 倉石平(2005) : チーム力を最大限に引き出すためのコーチの役割, コーチングクリニック, ベースボールマガジン社